HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	倭名類聚抄の板本について
Author(s)	宮澤, 俊雅
Citation	北海道大學文學部紀要, 46(2), 77-126
Issue Date	1998-01-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33699
Type	departmental bulletin paper
File Information	46(2)_PR77-126.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

倭名類聚抄の板本について

宮澤俊雅

倭名類聚抄の板本には三類ある。大字本、小字本、享和本の三つである。このうち享和本は十巻本の尾張本の模刻であり、別途論じたことがあるので[1]本稿では取り上げない。大字本・小字本はいずれも、二十巻本の元和古活字本を元にした整版本であり、倭名類聚抄の諸本・本文研究にとって、古活字本の本文以上に出るものはほとんどないが、一応、倭名類聚抄諸本の一端を占めるものではあり、江戸時代には準拠すべき本として流布したものであるから、相応の整理・記述をしておくことは必要であろう。

倭名類聚抄板本について従前の記述・言及を見ると、狩谷棭斎の『箋注倭名類聚抄』には次のように記されている。[2]

> 刻板本二　巻尾題云、慶安元戊子歳霜月吉辰新刊、蓋坊刻也、是本依活字本重刊、而有一二校改、重刊之際、亦不免誤脱、又有題寛文丁未歳仲秋日村上某刊行者、或題大坂心齋橋澁川某版者、皆書估轉購印版者、當時所改題、非重彫者也、又有小字版本、巻尾題云、寛文十一孟冬洛陽書林積徳堂開版、又有題貞享五戊辰年暮秋吉辰神雒銅

駝坊書肆村上平樂寺重梓、是亦依慶安版本重刻者、刪去毎巻首子目、開巻先知其非舊貫、西土坊刻之書、間亦有是類、（板本には二種ある、第一種（大字本）は、1（慶安版）巻尾に「慶安元戊子歳……」の刊記があるもの――恐らく坊刻であろう。古活字本による重刊で、若干の校改があり、また誤脱している所もある――と、2（寛文版）「寛文丁未歳……」の刊記があるもの――村上某刊行のものと大坂心齋橋澁川某の版とあり――とがある。寛文版はいずれも版木を買い取って刊記だけ改めて印行したもので、彫り直したものではない。第二種（小字本）は（寛文版）「寛文十一……」の刊記のあるものと、2（貞享版）「貞享五戊辰年……」の刊記のあるものとがある。小字本は大字本の慶安版によって彫り直したもので、各巻冒頭の目録を省いており、一見して旧態を失っていることがわかる。西土坊刻の書にはこの手の物が多い。）

すなわち、二種の版木があり、大字の慶安版、寛文村上版、寛文渋川版、小字の寛文積徳堂版、貞享村上版の五種に言及している。

一九七二年の『国書総目録』[3]では和名類聚抄の板本として慶安元年版一二本、万治二年版一二本、寛文七年版三四本、寛文十一年版一九本、貞享五年版一八本、嘉永四年版一本、刊年不明五〇本を挙げている。

一九七八年の中田祝夫氏「和名抄関係事項略年表（稿）」では、板本関係の記述は次のようになっている。[4]

慶安元年（一六四八）　十一月、元和三年古活字版を整版覆刻。

万治二年（一六五九）　九月、元和三年古活字本によりて整版覆刻（二十巻本）。

寛文七年（一六六七）　慶安元年版本を再印。
寛文十一年（一六七一）　伊勢、中西信慶蔵本を刊行。小字（二十巻本、残欠を十巻本にて補入）。
貞享五年（一六八八）　村上平楽寺版刊行（慶安版の巻首の目録を削り覆刻）。

右の記述は杜撰と言わざるを得ない。慶安版は古活字本の「覆刻」とあるが、これは「重刊」の意に用いられているのであろうか。慶安版は古活字本をもとにした新刻十行十七字本であって、古活字本（九行十六字本）をそのまま「覆刻・かぶせ彫り」にしたのではない。万治版も古活字本の覆刻となっているが、実際は、慶安版と同一版木による再印である。また万治版のみ（二十巻本）とことさらに明記するのも不審。寛文十一年版についての記述には絶句。実際は慶安版をもとにした新刻十三行二十二字本である。貞享版を慶安版の覆刻とするが、実際は寛文十一年版の再印である。

一九八七年に高梨信博氏は早稲田大学蔵資料影印叢書の「倭名類聚鈔解題」で慶安版と寛文村上版・寛文渋川版について次のように述べている。(5)

寛文七年版には、……渋川清右衛門刊本と村上勘兵衛刊本の二種類が存在する。この二種類は同じ版木によっているが、巻二十の巻末、第二十五丁から第二十八丁までの四葉は別版木である。……

つまり寛文七年版『倭名類聚鈔』は慶安元年版の後刷本であり、そのなかでも、渋川清右衛門刊本は村上勘兵衛刊本につぐものである。

一九八九年に不破浩子氏は『箋注倭名類聚抄の研究　一―序』[6]で大字の慶安版、万治中村版、寛文村上版、寛文渋川版、同秋田屋発兌版、同銭屋版、小字の寛文積徳堂版、貞享村上版、無年記渋川版、明治秋田屋発行版の一〇種を挙げ、慶安版は「古活字本に、他本により加條し、或は脱條して、整版出版したもの」であり、万治版以下銭屋版までは「その版木を扱う書肆が変わっただけで同一版木による重版」、寛文積徳堂版は「各巻頭の目次を刪り、はじめに総目録を附して、内容は変えず、細字にして、コンパクト化をはかった」もので、貞享版以後はこれと同一版木であるとしている。

一九九〇年の『古典籍総合目録』[7]では万治二年版三本、寛文七年版九本、寛文十一年版三本、貞享五年版三本、明治二年版二本、その他一六本が挙がっている。

以上の諸記述をまとめれば、大字本には慶安版（古活字本に基づく新刻）、万治中村版（以下重印）、寛文村上版、寛文渋川版（一部改刻）、同秋田屋発兌版、同銭屋版の六種、小字本は寛文積徳堂版（慶安版に基づく新刻）、貞享村上版（以下重印）、渋川版、嘉永版、明治秋田屋発行版の五種が数えられることとなる。倭名類聚抄の板本出版のおおよその流れはこのようになろう。以下この流れに沿って、実物または写真で披見に及んだ諸本を分類整理しようと思う。

板本倭名類聚抄で現在までに実物を披見したものは五四本、写真、フィルム、影印等によって確認したものは三〇本、都合八四本を刊記、奥付書肆、見返し年記などにより以下のように分類整理することができる。

大字本

大字本は内容的には一部増補はあるものの、大体は古活字本を引き継いで、序―題倭名鈔―凡例―本文から成っている。古活字本は全面九行十六字詰に組んであるが、大字本は序のみ八行十四字詰で、他は十行十七字詰である。古活字本は漢字のみの白文であるが、大字本は詳密な訓点が施されている。丁数は序四丁、題倭名鈔三丁、凡例一丁、巻一が一七丁、巻二が一九丁、巻三が二四丁、巻四が一五丁、巻五が二四丁、巻六が三〇丁、巻七が二二丁、巻八が二〇丁、巻九が二一丁、巻十が一七丁、巻十一が一六丁、巻十二が二四丁、巻十三が一六丁、巻十四が一八丁、巻十五が一四丁、巻十六が二〇丁、巻十七が二一丁、巻十八が二〇丁、巻十九が二五丁、巻二十が二八丁、総計四一九丁である。匡廓は四周双辺、竪199㎜×横150㎜（巻一1オ内距）、柱刻は、上下黒魚尾・黒口、「和名序　一（～四）」「題和名　一（～三）」「和名凡例　一」「和名巻之一　十七」～「和名巻之廿　廿八」の形式をとる。

以下、大字本の刷りの比較は、巻一1オ、巻三7ウ、巻九1オ、巻十六10オ、巻十九2ウ、巻二十28オ、巻二十28ウの七面についてのみ行ったものである。

1慶安版

慶安版は慶安元年の刊記をもつもので、巻二十末尾が下のようになっている。題簽は複廓で「和名類聚鈔〔一二〕」～「和名類聚鈔〔十九二十〕」の形式で（模写図5）、竪164㎜×横32㎜、各冊左肩。

倭名類聚鈔巻第二十終

慶安元子戊曆霜月吉辰　新刊

図1　大字本巻第一冒頭

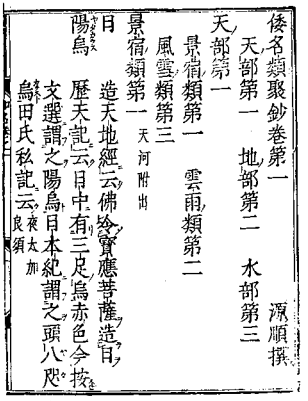

倭名類聚鈔卷第一　源順撰
天部第一　地部第二　水部第三
天部第一
景宿類第一　雲雨類第二
風雪類第三
景宿類第一　天河附出
日　造天地經云佛於寶應菩薩造日
陽烏　歷天記云日中有三足烏赤色今按
文選謂之陽烏日本紀謂之頭八咫
烏田氏私記云良加須

図2　大字本巻第二十末尾（慶安版後刷刊記）

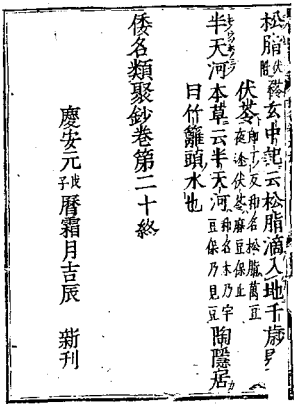

柧脯（俗用脩字）玄中記云柧脯滴入地千歳（伏苓（神十ノ反和名柧朧萬豆夜途伏苓麻豆保止和名本乃宇豆保乃見豆）陶隱居半天河（本草云半天河和名本乃宇豆保乃見豆）日竹離頭木也
倭名類聚鈔卷第二十終
慶安元戊子曆霜月吉辰　新刊

図3　寛文渋川版刊記（北海道大学蔵本）

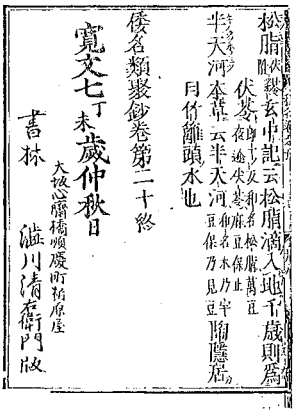

柧脯（俗用脩字）玄中記云柧脯滴入地千歳則爲
伏苓（神十ノ反和名柧朧萬豆夜途伏苓麻豆保止）
半天河（本草云半天河和名本乃宇豆保乃見豆）陶隱居
日竹離頭木也
倭名類聚鈔卷第二十終
寛文七丁未歳仲秋日
大坂心齋橋順慶町新原屋
書林　澁川清右衛門版

図4　奥付・秋田屋発行

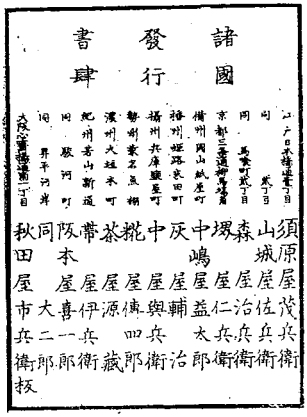
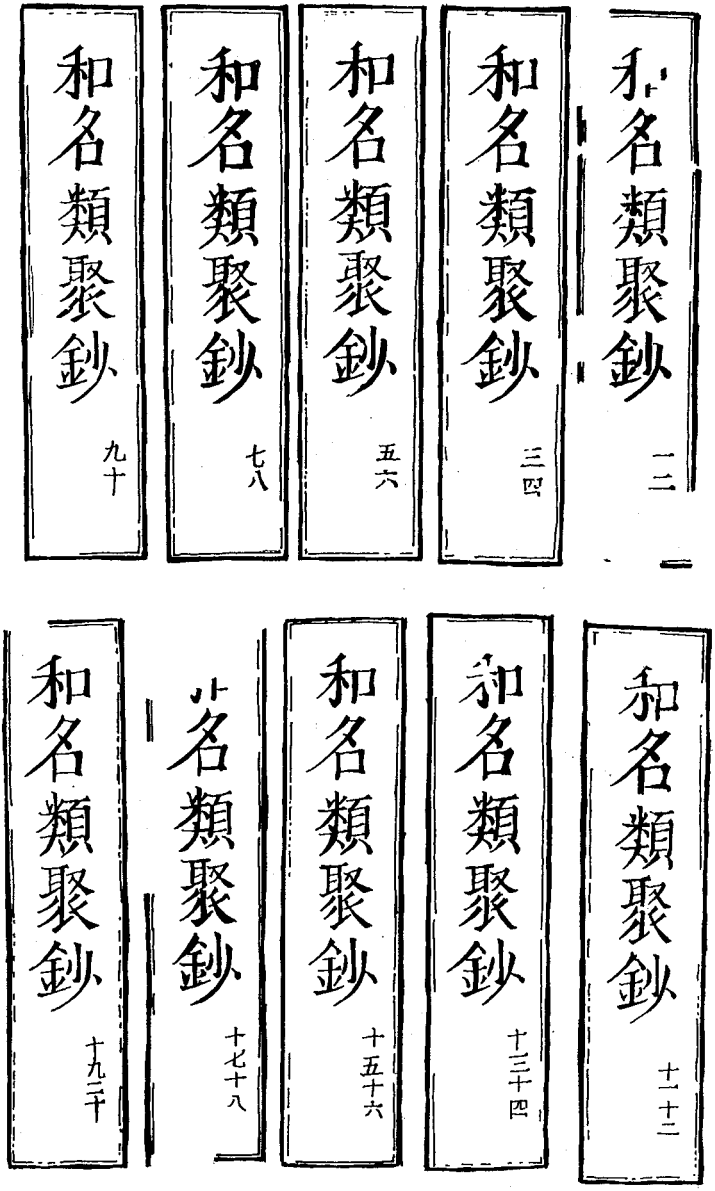

諸國發行書肆
京都三条通柳馬場東江入町　須原屋茂兵衛
同　鳥丸通六角下ル町　山城屋佐兵衛
同　堺筋二条下ル町　森屋治兵衛
播州姫路本町　堺屋仁兵衛
播州岡山紙屋町　中嶋屋益太郎
播州姫路本四ツ町　中戻屋輔治
播州兵庫津南町　靴屋與兵衛
播州赤穂大石町　茶屋傳四郎
濃州大垣本町　屋源藏
紀州若山新通　帶屋伊兵衛
同　駿河町　阪本屋喜一郎
同　昇平河岸　秋田屋大二郎
大坂心齋橋通二丁目　市兵衛板

図5　慶安版題簽模写


和名類聚鈔　一二
和名類聚鈔　三四
和名類聚鈔　五六
和名類聚鈔　七八
和名類聚鈔　九十
和名類聚鈔　十一十二
和名類聚鈔　十三十四
和名類聚鈔　十五十六
和名類聚鈔　十七十八
和名類聚鈔　十九二十

慶安版は刷りの先後により二つに分けられる。

a 慶安版・先刷

先刷は二巻ずつを一冊とし全十冊、大きさ約28cm×約20cm、厚さ約51～52㎜である。表紙は無地濃褐色、先刷りは次の四本を確認した。

○国立国会図書館蔵亀田文庫本　813.2-M 494 w

○多和文庫蔵西山本　7-3　国文学研究資料館マイクロフィルム271-107-1（紙焼写真K784）による、

○国立公文書館蔵内閣文庫稲葉本　208-110

○国立公文書館蔵内閣文庫不忍文庫本　特60-10　巻十七～巻廿を欠き、四巻ずつ四冊とするが、元の二巻ずつ冊を改装したもの、刊記部分（巻二十）を欠くが、刷りの状況から慶安版先刷と判断した。無地小豆色の替表紙、第一冊は手書貼題簽、第二冊以下は朱筆直書外題、

b 慶安版・後刷

後刷は図6に示すような欠落が見られる。刊記・大きさ・題簽は先刷と同じ。

○東京大学総合図書館蔵内山本　D20-32　十冊（三冊に帙状合綴）、無地紺色原表紙、厚さ59㎜

○上総舎蔵本　五冊（もと十冊を改装したものか）、無地暗褐色原表紙、題簽は先刷と同じ、ただし元の第一・二・四・五冊に「一二」・「五六」・「十三十四」・「十七十八」を使用。第三冊目は題簽無し、厚さ55㎜

◎この他に各種目録類により、以下の慶安版の所在が確認される。先刷・後刷の別は不明である。

宮内庁書陵部二本、神宮文庫、天理図書館、無窮会神習文庫、牧野植物園、慶応大学斯道文庫、神戸大学住田文庫、東京大学史料編纂所三本、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校青山文庫、村野文庫、金沢文庫、京都外国語大学、

2万治中村版

万治版は、慶安版の刊記を削り、下のようにしたものである。慶安版後刷に比して、欠落が少し増えている(図7)。大きさ約28㎝×約20㎝、表紙は無地藍色、題簽は慶安版と同じ。

倭名類聚鈔巻第二十終

萬治貳己亥九月吉辰中村長兵衛刊

○大和文華館蔵鈴鹿文庫本　0-2754～2756　資料館マイクロフィルムによる。改装三冊(原装不詳)、題簽は慶安版の「一二」を第一冊に、「七八」を第二冊に、「十三十四」を第三冊に用いる、

○国立公文書館蔵内閣文庫記録局本　208-109　第一冊は題簽無し、厚さ53㎜

○加賀市立図書館蔵聖藩文庫本　資料館マイクロフィルム296-1・3-8による。巻五～二十の十六巻存、但し巻一四は小字本(寛文積徳堂版)で補い、巻一～五を第一冊、巻六～八を第二、以下四巻ずつ一冊とし、都合五冊、題簽は第三冊にのみ原題簽あり、

図6　右　慶安版先刷・左　同後刷

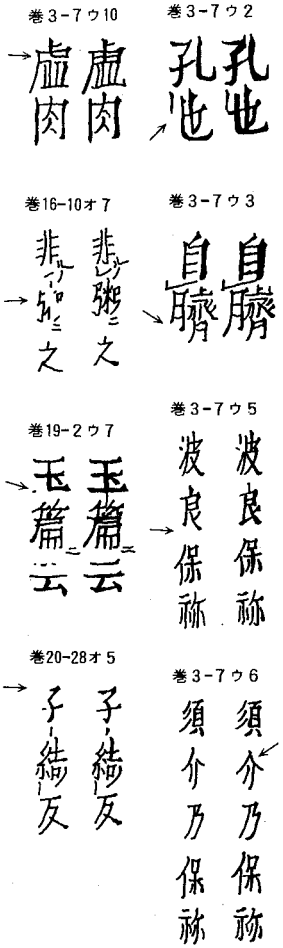
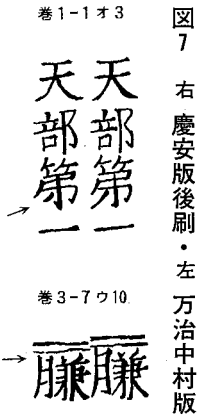


図7　右　慶安版後刷・左　万治中村版



◎万治中村版所在、
宮内庁書陵部二本、岡山大学池田文庫、京都大学、慶応大学斯道文庫、東京大学史料編纂所、広島大学二本、島原公民館松平文庫、杏雨書屋、玉川大学、和歌山大学、牧野植物園二本、駒沢大学濯足文庫、高山市郷土館香木園文庫、竹柏園文庫、浅野図書館（焼亡）、東京大学国語研究室（焼亡）、

3寛文村上版
寛文村上版は万治版の刊記を削り、下のようにしたものである。
寛文村上版は刷りの先後により二つに分けられる。

倭名類聚鈔巻第二十終
寛文七丁未歳仲秋日村上勘兵衛刊行

a寛文村上版・先刷
先刷りは万治版に比して図8に見られるような欠落等が生じている。原装十冊、大きさ約27cm×19cm、表紙は無地紺色、題簽は慶安版と同じ。
○大和文華館蔵鈴鹿文庫本　0-2744～2753　資料館マイクロフィルム257-249-2（K868）による、序―凡例―題倭名鈔の順になっている、
○賀茂別雷神社蔵三手文庫本　国文―卯・111　資料館マイクロフィルム39-15（K76）による、第四・九冊題簽無し、
○東京大学総合図書館蔵旧図書寮本　D20-70　十冊、帙状合綴三冊　厚さ49㎜

○国立国会図書館蔵大久保本　せ-9　原十冊、二冊ずつ表紙ごと合五冊、無地薄青色替表紙、手書き朱書貼題簽、厚さ59㎜

○国立公文書館蔵内閣文庫秘閣本　209-11　褐色横刷毛目替表紙、複廓刷り手書き題簽、厚さ55㎜、序―凡例―題倭名鈔の順になっている。

b寛文村上版・後刷

後刷は図9に見られるような欠落が生じている。表紙は無地紺色、原装十冊、題簽は慶安版と同じ。

○射和文庫本　資料館マイクロフィルム38-14（K47）による、巻五―九を欠く、巻一―四と巻十―十二の七冊を上冊、巻十三―二十の八冊を下冊とする。題倭名鈔―序―凡例の順になっている。

○東京大学総合図書館蔵南葵文庫本　D20-98　第三冊を欠き、三冊ずつ帙状合綴三冊、約27㎝×約19㎝、大野広城校本（転写）、

○東京大学国語研究室蔵黒川文庫大野本　27-268　約26㎝×約18㎝、花紋押紺色替表紙、手書き題簽、厚さ78㎜（挿入紙含む）、大野広城校本、追加挿入三〇紙程あり、なお本書の刷りは次の渋川版と同程度に欠落が進んでいる。

○国立公文書館蔵内閣文庫取り合せ本　263-16　後述小字本（渋川版・先刷）と取り合せになっている、巻十七～二十の一冊、約28㎝×約19㎝、複廓刷り手書き題簽、先刷か後刷か未確定であるが、ここに入れておく。

◎寛文村上版所在、刷りの先後は不明。

天理図書館古義堂文庫二本、大阪府立図書館　岡山大学池田文庫、同大原文庫、牧野植物園、九州大学麻生文庫、

図8　右 万治中村版・左 寛文村上版先刷

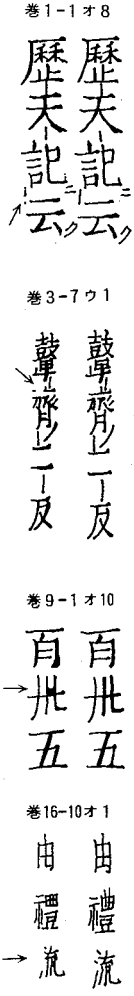
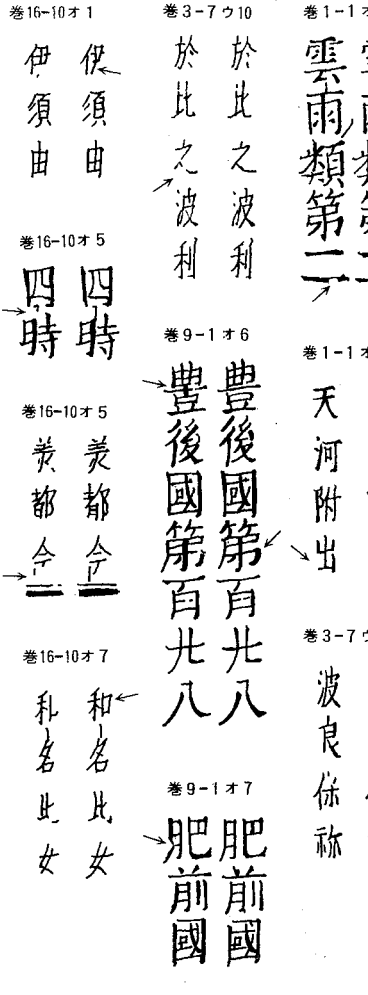


図9　右 寛文村上版先刷・左 同後刷



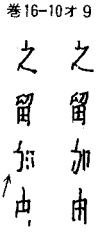
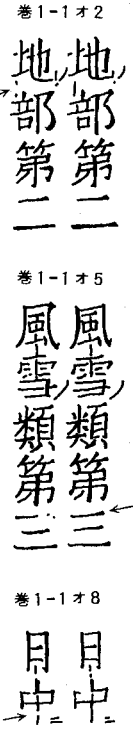


図10　右　寛文村上版後刷・左　寛文渋川版



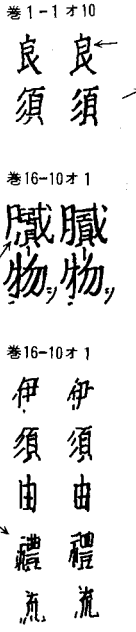


図11　右　寛文渋川版・左　秋田屋発行版

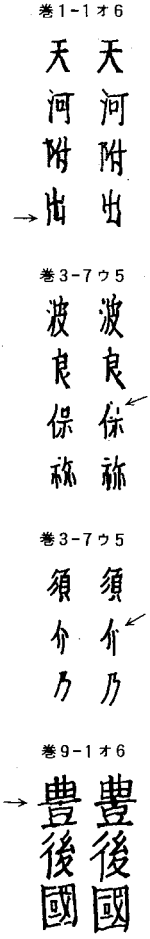
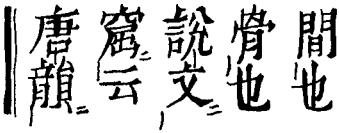


図12

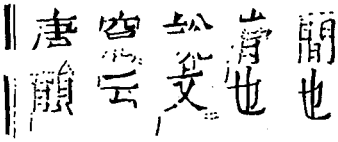
慶安版



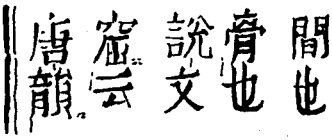
同後刷

寛文村上版

寛文渋川版

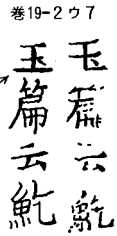


秋田屋発行版

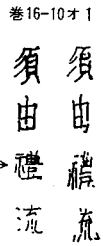


巻3-7ウ6~10

巻19-2ウ7

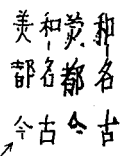


巻16-10オ1

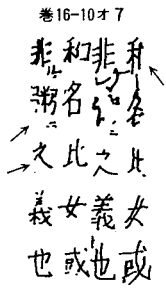


巻20-28オ7

巻16-10オ5



巻16-10オ7



九州大学、東北大学三本、龍谷大学二本、加州大学バークレー校(旧三井鶚野)、八戸市立図書館、岡山県青少年教育センター閑谷学校、竹田市立図書館岡藩由学館典籍、

4寛文渋川版

寛文渋川版は寛文村上版の末尾、巻二十の二十五～二十八の四葉をかぶせ彫りで彫り直したものである。刊記部分は下のようになっている。一見寛文村上版の刊記を削ったように見えるが、実はこの葉全体が彫り直されている。刷りは村上版後刷に比して図10に示すような欠落が見られる。寛文渋川版の中にも刷りの先後があるかもしれないが、未だ確認し得ていない。原装は四巻ずつ五冊、大きさ約27㎝×約19㎝、厚さ約60㎜のものと約80㎜のものがある。表紙は白地に褐色刷毛目格子、題簽は慶安版とは異なり、新刻の単廓で、「和名類聚抄　一」の形式であるが冊ごとに書体・字体を替える(模写図13)、竪189㎜×横35㎜(内距)、左肩。

倭名類聚鈔巻第二十終

寛文七丁未歳仲秋日

大坂心齋橋順慶町柏原屋

書林　澁川清右衛門　版

○国立国会図書館蔵横山本　830-169　厚さ79㎜、横山由清校本、
○東京大学国語研究室黒川文庫清水本　27-277　清水浜臣校本、
○国立公文書館蔵内閣文庫図書局本　209-1　厚さ60㎜

図13　渋川版題簽模写

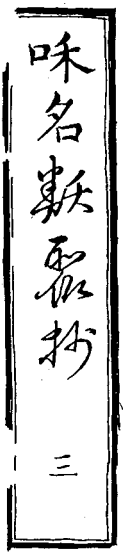


図14　大野木版題簽模写

○国立公文書館蔵内閣文庫柳誌本　209-10　厚さ64㎜
○北海道大学文学部蔵青洲文庫本　495.22-WA　第五冊裏表紙を欠く、厚さ80㎜、もと東京大学総合図書館の複本、
○早稲田大学蔵本、早稲田大学蔵資料影印叢書による。桜斎書入本、黒川家旧蔵、
○国立国会図書館蔵榊原本　198-22　厚さ60㎜
○国立公文書館蔵内閣文庫寺西本　209-8　厚さ61㎜
○多和文庫真精本　7-4　資料館フィルム271-108-2による、この本は各所に補修がなされており、実質的には次の秋田屋版と同じものである。恐らく奥付部分に校合識語を書くために秋田屋の奥付を剝ぎ取ったものであろう。
◎寛文渋川版所在
国立国会図書館岡田希雄旧蔵　関西大学生田文庫、同岩崎文庫、鹿児島大学玉里文庫、都立中央図書館河田文庫、和歌山大学附属図書館真砂町分館紀州藩文庫、福井県立図書館松平文庫、射和文庫、牧野植物園、福井県立大野高校、皇学館沢潟文庫、三康図書館、半田市立図書館、杏雨書屋、宮城県立図書館、新村出記念財団重山文庫、山梨文学館、大阪女子大学、
◎寛文七年版所在、村上版・渋川版いずれか未詳、
国立国会図書館白井本、静嘉堂文庫青木信寅旧蔵　同松井文庫、宮内庁書陵部四本、大阪市立大学福田文庫、九州大学麻生文庫、京都大学、筑波大学二本、慶応大学斯道文庫、国学院大学、東京大学法研、日本大学、広島大学、京都府図書館、都立中央図書館、神宮文庫、無窮会平沼文庫、岡山大学小野文庫、射和文庫、大東急記念文庫、宣長記念館、伊達開拓記念館、西尾市立図書館岩瀬文庫、市立三原文庫、羽中八幡文庫、村野文庫、京城大

学、濯足庵、高野山光台院、東京大学四本（焼亡）、

5秋田屋発兌版

秋田屋発兌版は、寛文渋川版と同一版木であり、刊記も寛文渋川版のままであるが、裏表紙見返しに秋田屋の他に江戸の五書肆の名を連ねた下のような奥付が貼られているものである。版権が柏原屋から秋田屋に移った後の印刷で、図11に見られるように各所に補修が行われている。表紙は刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じ。

○佐賀県立図書館本　991-2-126　資料館フィルム81-21-2による、第二冊を欠く、

◎秋田屋発兌版所在、

大阪天満宮、

6秋田屋発行版

秋田屋発行版は秋田屋発兌版と同じものであるが、奥付が下の体裁になっているものである。

和漢書籍精造發兌

江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
今　　貳丁目　須原屋新兵衛
今　浅艸茅町壹丁目　須原屋伊　八
今　日本橋通貳丁目　山城屋佐兵衛
今　芝　神　明　前　岡田屋嘉　七

大坂心齋橋南ェ壹丁目　秋田屋市兵衛

諸國發行書肆

江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　馬喰町貳丁目　堺屋森治兵衛
京都三條通柳馬場角　中嶋屋仁兵衛
備州岡山神屋町　灰屋益太郎
播州姫路米田町　中屋輔治
攝州兵庫鹽屋町　糀屋與兵衛
勢州　幸名魚棚　傳四郎
濃州大垣本町　茶屋源藏
紀州若山新通　帶屋伊兵衛
同　駿河町　阪本屋喜一郎
同　昇平河岸　同屋大二郎
大阪心齋橋通南一丁目　秋田屋市兵衛板

○国立公文書館蔵内閣文庫制度局本　263-17　第二・三冊を欠く、

7銭屋版

不破浩子氏にこの版があるとの報告があるので挙げておく。(8)寛文渋川の刊記の他に

京都書肆　寺町通本能寺前　銭屋惣四郎

の出版識語があるとのことである。恐らく秋田屋版と同じ補修版であろう。

小字本

小字本は内容的には大字本を訓点も含めて継承しているが、目録類の扱いが異なっている。大字本は古活字本の形式をそのまま踏襲している。すなわち各巻の冒頭にその巻に収める部門の目録をおき、巻の途中にある部頭には部名も門目録も乗せない形式になっている。小字本では大字本巻頭の部門目録を削除し、かわりに凡例の次に「倭名類聚鈔目録」を添えている(また、各部頭に部名を追加している)。従って序―題倭名鈔―凡例―目録―本文の順となっている。丁数は序が三丁、題倭名鈔が二丁、凡例が一丁、目録四丁、本文は二巻ずつ通して丁附がされており、巻一・二が二〇丁、巻三・四が二三丁、巻五・六が二七丁、巻七・八が一八丁、巻九・十が一八丁、巻十一・十二が二三丁、巻十三・十四が二〇丁、巻十五・十六が一九丁、巻十七・十八が二三丁、巻十九・二十が三一丁、総計二三二丁であ

図15　小字本総目録

倭名類聚鈔惣目録

巻第一　天部一　景宿類一　雲雨類二　風雪類三
地部二　山谷類四　巖石類五　林野類六
田園類七　塵土類八
水部三　水泉類九　河海類十　涯岸類十一
歳時部四　春三月十二　夏三月十三　秋三月十四
冬三月十五
鬼神部五　神霊類十六　鬼魅類十七
巻第二　倫部六　男女類十八　老幼類十九　工商類二十
漁獵類二十一　微賤類二十二　氣盗類二十三
親戚類二十四　父母類二十五　伯叔類二十六　兄弟類二十七

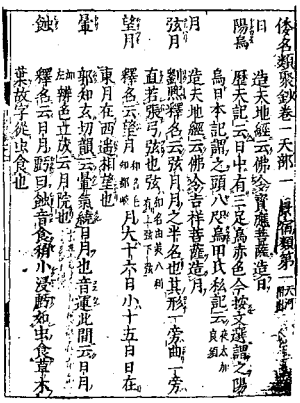


図16　小字本巻第一冒頭

倭名類聚鈔巻一天部一　景宿類第一　天河附

日　造夫地經云佛冷寶應菩薩造日
陽烏　歴天記云日中有三足烏赤色今按文選謂之陽烏日本記謂之頭八尺烏田氏私記云良太加

月　造夫地經云佛冷吉祥菩薩造月
弦月　劉熙釋名云弦月月之半名也其形一旁曲一旁直若張弓弦也弦和名由美八利有上弦下弦
望月　釋名云望月和名毛知都岐月大十六日小十五日日在東月在西遥相望也
暈　郭知玄切韻云暈氣繞日月也音運此間云日月加左辨色立成云月院也
蝕　釋名云日月虧曰蝕音食稱小浸虧如虫食草木葉故字從虫食也

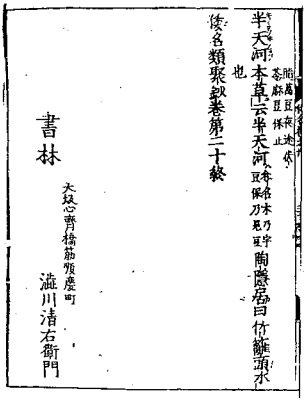


図17　小字本巻第二十末尾（寛文積徳堂版刊記）

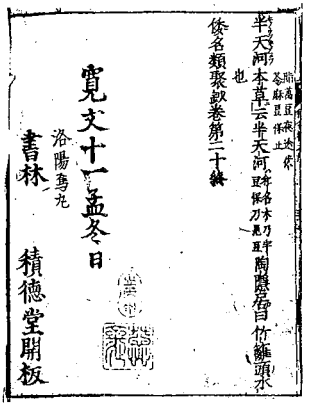


図18　無年記渋川版刊記

る、匡廓は四周単辺、竪231㎜×横174㎜（巻一1オ内距）、柱刻は上下黒魚尾・黒口、「和名序　一（〜三）」「題和名　一（〜二）」「和名凡例　一」「和名目録　一（〜四）」「和名巻之一　一」〜「和名巻之廿　卅一」の形式をとる、

以下、小字本の刷りの比較は、巻一1オ、巻五1オ、巻十10オ、巻十六19ウ、巻十八13オ、巻二十21ウの六面についてのみ行ったものである。

8寛文積徳堂版

寛文積徳堂版は巻二十末尾に下のごとき刊記がある。二巻ずつを一冊とし全十冊、大きさ約28cm×約20cmまたは約27cm×約19cm、厚さ約29〜32㎜である。表紙は無地黒色または無地紺色、題簽は左肩、複廓で、第一冊は「倭名類聚鈔（序目録／一二）」、それ以外は「倭名類聚鈔（三四）」の形式である（模写図19）。竪164㎜×横33㎜（内距）。この版は刷りにより先後を分けることが出来ると思われるが、いまだ披見本数が多くないので分けずにおく。

倭名類聚鈔巻第二十終

寛文十一孟冬日

洛陽烏丸

書林　積徳堂開板

○東京大学国語研究室蔵本　19-166　約28cm×約20cm、無地黒色原表紙、

○東京大学総合図書館蔵南葵文庫本　D20-192　約26cm×約19cm、無地紺色原表紙、第五・七・九冊の題簽無し、

図19　積徳堂版題簽模写

○上総舎蔵本、改装五冊、約27cm×約19cm、無地紺色原表紙、第三冊の題簽無し、なおこの本はすでに貞享村上版と同様の欠損がいくつか生じている。

○国立公文書館蔵内閣文庫聖屋本　209-3、改装三冊、約27cm×約19cm、無地紺色原表紙、手書替題簽「和名抄上(中・下)」、

○加賀市立図書館蔵聖藩文庫本　資料館マイクロフィルム296-1・3-8による。巻一～四の一冊存、巻五以下大字本（万治中村版）との取り合わせ、

◎寛文積徳堂版所在

静嘉堂文庫松井文庫、京都大学、日本大学、名古屋大学、龍谷大学大宮図書館、大阪府立図書館石崎文庫、都立中央図書館河田文庫、足利学校遺跡図書館、高野山金剛三昧院、高野山真別処、お茶の水図書館成簣堂文庫、天理図書館、茨城大学菅文庫、太宰府天満宮、大阪天満宮、駒沢大学濯足文庫、仙台第二高等学校、加州大学バークレー校、名古屋市立舞鶴図書館、米沢市立興譲館文庫、井本文庫、金刀比羅宮図書館、浅野図書館(焼亡)、東京大学（焼亡)、

9貞享村上版

貞享村上版は、寛文積徳堂版の刊記を削り、下のごとくにしたものである。この版は、図20に示すよう

倭名類聚鈔巻第二十終

貞享五戊辰年暮秋吉辰

神雒銅駝坊書肆村上平楽寺重梓

図20　右 寛文積徳堂版・左 貞享村上版

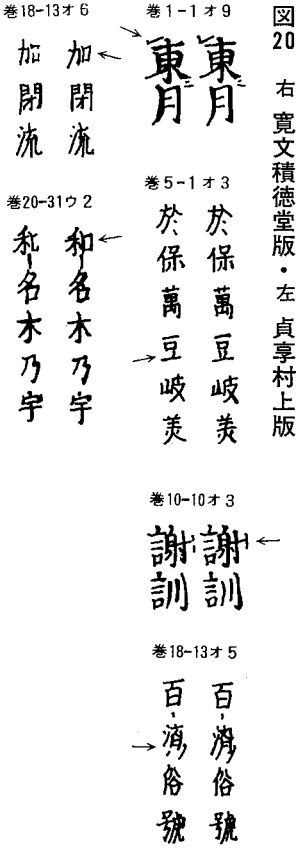
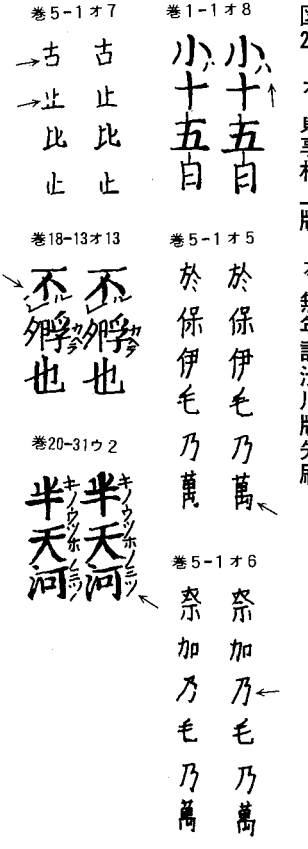


図21　右 貞享村上版・左 無年記渋川版先刷



な欠落が現れている。原装十冊、表紙は無地紺色、題簽は積徳堂版と同じ。

○国立公文書館蔵内閣文庫裏打本　209-6、約29cm×約20cm、無地紺色原表紙、手書替題簽「和名類聚鈔〔序凡例目録／一之二〕」「和名類聚鈔　三之四（〜十九二十）」、全紙に裏打ちが施してある、

○学習院大学国語国文学研究室蔵本　813-23-5004　資料館フィルム216-54-3による、改装四冊、原表紙、原題簽、

○愛知教育大学附属図書館蔵成章館本　813-W21　資料館フィルム80-143による、原題簽、巻一の第一丁を欠く、

○静岡県立中央図書館蔵葵文庫本　K021-1　資料館フィルム104-2-204による、改装四冊、手書替題簽「和名類聚鈔　一（一四）」

◎貞享村上版所在

国会図書館岡田希雄旧蔵、九州大学眼科、筑波大学、国学院大学、早稲田大学、東京大学史料編纂所二本、岐阜大学、都立中央図書館河田文庫、高野山金剛三昧院、神宮文庫、大東急記念文庫二本、加州大学バークレー校（旧三井鷲野）、茨城大学菅文庫二本、宮城県立図書館伊達文庫、蓬左文庫、牧野植物園、上田市立図書館藤廬文庫、浜松市立図書館高林文庫、山口県立図書館、岩国市立岩国図書館、竜野文庫、学書言志、法務省、

10渋川版（無年記渋川版）

無年記渋川版は、貞享村上版の刊記を削り下のごと

倭名類聚鈔巻第二十終

書林　大坂心齋橋筋順慶町　澁川清右衛門

くにしたもので、各所で現存することの最も多い版である。詳しく比較すれば刷りを数段階に分類できるであろうが、ここでは大まかに先刷・後刷の二段階に分け、欠落の少ないものから順次諸本を列挙する。

a 渋川版先刷

渋川版先刷は貞享村上版に比して図21に示すような欠落が見られる。厚さは約25㎜、原装五冊、題簽は慶安版の第一冊～第五冊を流用しているため題簽の巻次と内容が一致していない。

○国立公文書館蔵内閣文庫取合せ本　263-16　第一～四冊の四冊、第五冊は大字本(寛文村上版)の取合せ、約28㎝×約20㎝、無地褐色原表紙、原題簽、序―凡例―目録―題倭名鈔の順になっている、

○国立公文書館蔵内閣文庫阿部本　209-4　第五冊のみ一冊、約28㎝×約19㎝、無地白色替表紙、題簽無し(外題直書)、

○東京大学国語研究室蔵黒川文庫契沖本　改装一冊、約27㎝×約19㎝、無地褐色原表紙、手書替題簽(複廓刷)、厚さ27㎜

○本居記念館蔵本　諸7の58　資料館フィルム37-78による、原題簽、

○愛知教育大学附属図書館蔵本　823-W-39　資料館フィルム　80-173-2による、無地表紙、原題簽、

○上総舎蔵本　約26㎝×約19㎝、カラ押紺色原表紙、原題簽、厚さ25㎜、序―凡例―題倭名鈔―目録の順になっている、

○愛知教育大学附属図書館蔵明倫堂本　813-W-21　資料館フィルム80-143による、原表紙、原題簽、序―凡例―題倭

名鈔―目録の順になっている、

○上総舎蔵浜田本　約26cm×約19cm、無地紺色原表紙、原題簽、厚さ23㎜

○陽明文庫蔵本　近―ワ―36、資料館フィルム55-399による、手書直書外題、

○佐賀県立図書館蔵本　891-2-162　資料館フィルム81-21（K450）による、無地表紙、原題簽（第一冊は無し）、

○金沢市立図書館蔵稼堂文庫本　091-O-243　資料館フィルム274-30-1による、無地表紙、第三冊のみ原題簽、他は手書き替題簽「和名類聚鈔一（二・四・五）」

○国立公文書館蔵内閣文庫安原本　263-18　約27cm×約20cm、型押（菱・卍）原表紙、原題簽、厚さ27㎜

○白百合女子大学蔵本　813-Mi-38-2　改装一冊、無地表紙、原題簽（第1冊分）、序―凡例―題倭名鈔―目録の順になっている、

○刈谷市立図書館蔵本　2094　資料館フィルム30-273-3（K259）による、無地表紙、原題簽、

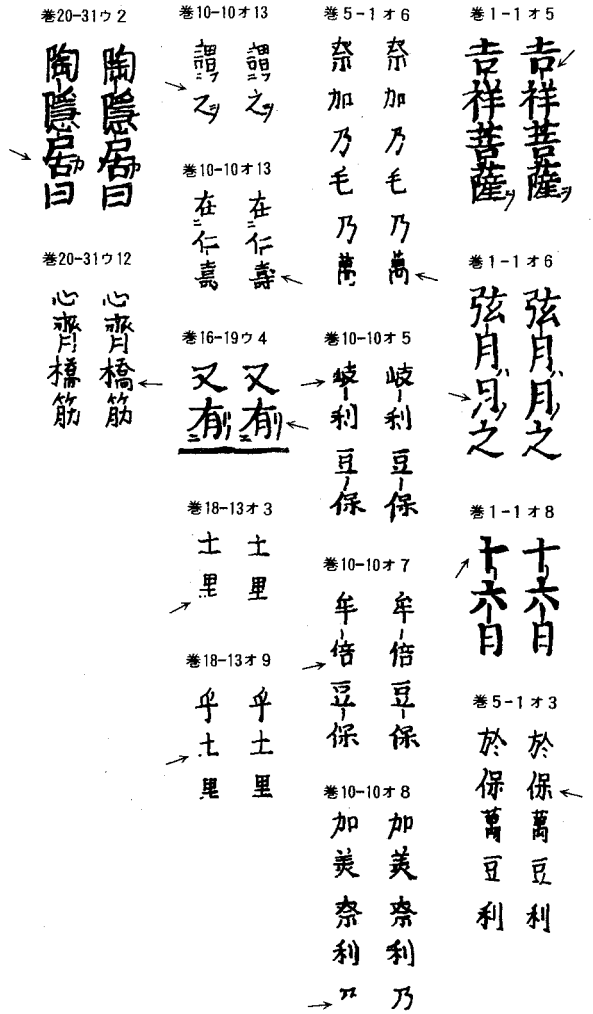
○浄照坊蔵本　資料館フィルム　シ4-32による、一冊（巻第一―四を欠き、巻十三―二十・五―十二の順に綴じる）、無地表紙、題簽無し、

○九州大学附属図書館本　文学部研究室貴重書3B2　資料館フィルム47-14-6による、無地表紙、原題簽、

b 渋川版（無年記渋川版）・後刷

渋川版の後刷は、先刷に比して図22に示すように各所で欠落が進んでいる。原装五冊、大きさは約27cm×19cm、表紙は褐色の刷毛目格子、題簽は大字本寛文渋川版と同じ。

図22　右 無年記渋川版先刷・左 同後刷



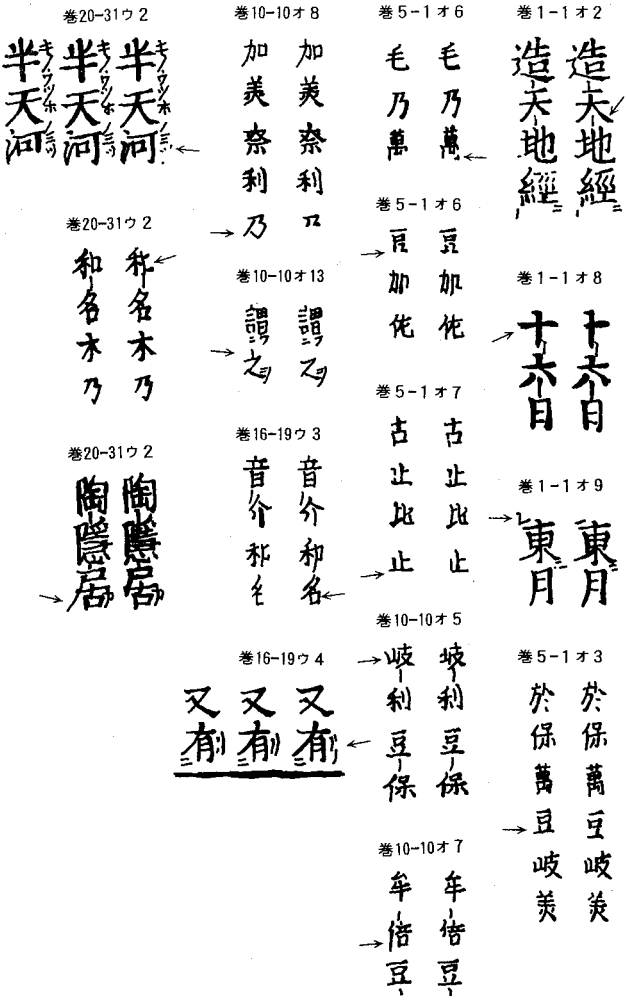
○東京大学国語研究室黒川文庫真頼本、27-279　約27cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ35㎜
○東京大学総合図書館蔵島田本　B20-86　原五冊のまま第一・二冊と第三冊以降の二冊に合綴、原表紙、原題簽、厚さ40㎜
○国立国会図書館蔵賓水本　813.2-M494w-N　原表紙、原題簽、厚さ39㎜
○国立公文書館蔵内閣文庫常代本　209-5　原表紙、原題簽、厚さ39㎜
○上総舎蔵洪字本　第五冊末尾三葉を欠く、原表紙、原題簽、題倭名鈔—序—凡例—目録の順になっている。
○上総舎蔵豊岡本　原表紙、原題簽、厚さ33㎜、題倭名鈔を欠く、
○東京大学総合図書館蔵穂積本　D20-211　原表紙、原題簽、厚さ40㎜
○東京大学総合図書館蔵青洲文庫本　D20-20　原五冊のまま第一・二冊と第三冊以降の二冊に帙状合綴、原表紙、原題簽、厚さ36㎜
○多和文庫本　資料館フィルム271-265-3による、序—題倭名鈔—目録—凡例の順になっている。
○上総舎蔵嵩山仕入本　第五冊のみ一冊、古書店で後掲の鏡之舎本（明治大野木版）とセットにして売り出されたもの（大きさは異なる）、約26cm×約20cm、原表紙、原題簽、
○会津若松市立会津図書館蔵本　4-イ-352　資料館フィルム251-3による、第五冊のみ一冊、原表紙、原題簽、
◎渋川版所在、刷りの先後は未詳、また補刻版も含まれているであろう。
九州大学九本、京都大学九本、筑波大学、慶応大学二本、神戸大学住田文庫、宮内庁書陵部、早稲田大学、大谷大学三本、東京大学史料編纂所、関西学院大学、東北大学、大阪大学、広島大学、福井大学小林文庫、秋田大学、

三重県立図書館、石川県立図書館、大阪府立図書館三本、京都府立図書館、関西大学泊園文庫、島原公民館松平文庫、お茶の水図書館成簣堂文庫、お茶の水図書館武藤文庫、天理図書館二本、無窮会神習文庫二本、神宮文庫四本、宮内庁書陵部、順天堂大学山崎文庫、新潟大学佐野文庫、和歌山大学附属図書館真砂町分館紀州藩文庫本、津山郷土館愛山文庫、秋月郷土館、北野天満宮、牧野植物園四本、酒田市立光丘文庫、東海大学桃園文庫、杏雨書屋二本、愛知図書館、東洋大学、福島県立図書館、青山学院大学、琉球大学、岡山大学業合・塩尻文庫、仏教大学西谷寺文庫、高知県立図書館、山口県立図書館、足利学校遺跡図書館、飯田市立飯田図書館、西尾市立図書館岩瀬文庫、金沢市立図書館藤本文庫、豊橋市立図書館、桜山文庫、大和文華館、高木文庫、竜野文庫、成田図書館、羽中八幡文庫、温古堂丸山文庫、村野文庫、仙台伊達家、延岡内藤家、福岡県立伝習館高等学校対山館文庫二本、市立弘前図書館二本、二松学舎大学、武蔵野美術大学美術資料図書館服部文庫、皇学館大学、彰考館(焼亡)、東京大学(焼亡)、

小字本・補刻版

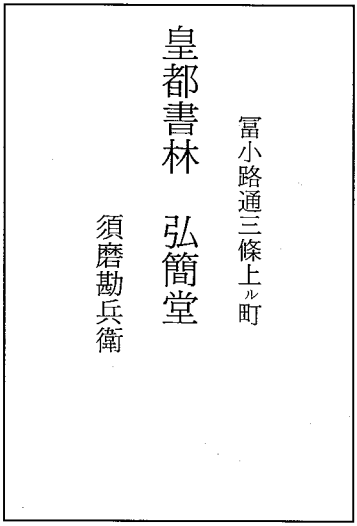
以下挙げるものは渋川版の欠落を補修し字崩れを補刻した版である。渋川版の刊記をそのままに残し、奥付けや見返し等で書肆名を示している。その外装の違いにより分類することができるが、刷りそのものには大差は無いようである。図23にあるように、随所に補修の跡を見ることができるが、同時に、補修されずさらに欠落の進んだものもある。この他にも巻十13オ11から13ウ13までの行末各一字、及び巻十四10オ1～7・巻十六13オ2～9・巻十七2オ2～8・巻十七4オ1～4ウ13・巻十九14オ2～13・巻二十18オ1～6の上部標目部分を埋木によって補刻し、また巻

図23　右　無年記渋川版後刷・左　補刻版



二十の第17丁と第20丁は全面を彫り直している。

補刻版は奥付と表紙見返しの組み合わせによって八類に分けられるが、披見した各類のほとんどが三本以下という数のため、各類と刷りの善し悪しの対応が明瞭でなく、補刻版全体で二段階乃至三段階程度にしか見分けることが出来ない。その中で弘簡堂の奥付をもつ版は概して補刻後の欠落が少ないようである。



11弘簡堂版

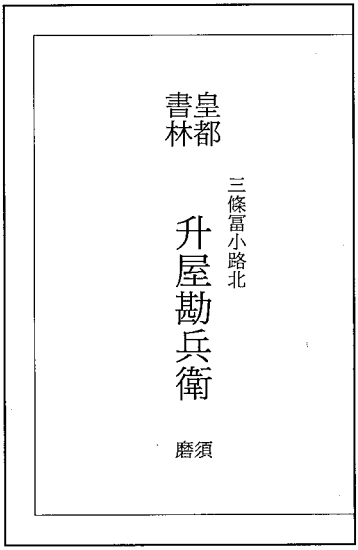
裏表紙見返しに右下のごとき奥付を貼付するものである。原装五冊、表紙は薄褐色刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じ、

○国立公文書館蔵内閣文庫戸籍本　209-7　約26cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ27㎜
○北海道大学文学部蔵宇野本　495.63-W　約26cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ30㎜
○国文学研究資料館蔵大庭本　マ3-40-1　約25cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ32㎜、もと東京大学総合図書館の複本（南葵文庫本）、
○国立公文書館蔵内閣文庫石谷本　263-19　第一冊を欠く、約25cm×約19cm、原表紙、原題簽、
○九州大学附属図書館本　文学部研究室貴重書3B1　資料館フィルム47-14-1による、原表紙、原題簽、

◎弘簡堂版所在
東北大学、

12升屋版

升屋版は、奥付が下の如くなっているものである(外辺に鶴の文様を配し、「升屋勘兵衛」の下の「須／磨」は篆書で記し銅壺の図絵で囲む)。弘簡堂版と同じ須磨勘兵衛によるもの。補刻版の後刷、原装五冊、表紙は褐色刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じ。



○国文学研究資料館蔵初雁文庫本　12-410-1　約26cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ29mm
○青森県立図書館蔵工藤文庫本　I 813-W　無地表紙、原題簽、
◎升屋版所在
東北大学狩野文庫、高鍋町立図書館高鍋藩明倫堂文庫、

13嘉永山田版

嘉永版は表紙見返しに「嘉永辛亥補刻兌」「京攝書肆／弘簡堂／竹苞樓／寶文堂／合梓」とあるもので(図26)嘉永四年(一八五一)に弘簡堂(升屋勘兵衛)・竹苞樓(銭屋惣四郎)・寶文堂(秋田屋市兵衛)の三書肆の合梓と

図24　奥付・弘簡堂版模写（北海道大学蔵本）

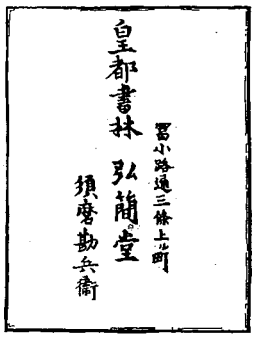


図25　奥付・山田版

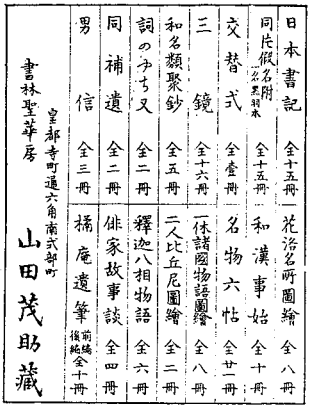


図26　見返・嘉永版

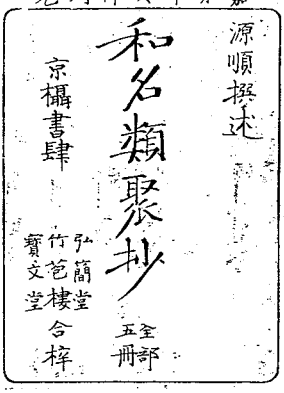
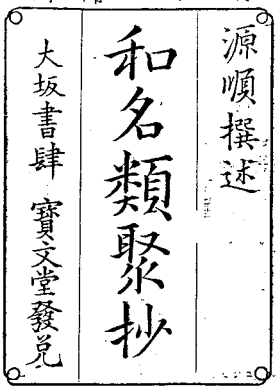


図27　見返・明治版



なっている。披見に及んだ嘉永版は一本のみに過ぎないので確実なことは言えないが、嘉永四年当時のものは奥付があるとすれば秋田屋等のものが期待されるところである。しかし披見のものは販売目録を兼ねた山田茂助の奥付がついている(図25)。恐らくこの本は嘉永当時のものではないのであろう。嘉永山田版は補刻版としてもかなり後の刷りで、補刻時の埋木が剝がれ落ちたかと思われる箇所も見受けられる。原装五冊、表紙は褐色刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じ、

○上総舎蔵本、五冊、約26㎝×19㎝、厚さ29㎜

◎嘉永版所在

大阪市立愛日小学校、大阪市立大学新村文庫、奈良県立図書館、東京大学（焼亡）、

14銭屋版

銭屋版は下のような奥付のあるものである。補刻版の後刷、原装五冊、題簽は寛文渋川版と同じ。

○岐阜市立図書館蔵本　81-11　資料館フィルム253-102-2による、無地表紙、

○岐阜市立大学附属図書館蔵本　813.2-7.1-5-1725　資料館フィルム98-107-3による、無地表紙、

◎銭屋版所在、

寺町通本能寺前
皇都　銭屋惣四郎

順天堂大学山崎文庫、

15娑々岐版

娑々岐版は、銭屋版と同じ佐々木惣四郎によるものであるが、奥付が下のようになっているものである。補刻版の後刷、表紙は薄褐色刷毛目横引、題簽は新刻、寛文渋川版の第五冊目の字体・書体を覆刻したもの、単廓に「和名類聚抄　」と書題だけの形式で、全冊同じものを使用。題簽を補った所から見て、銭屋版よりは後のものであろう。

京極通本能寺前
洛陽書肆　娑々岐惣四郎

○国立公文書館蔵内閣文庫太政官本　209-9　約26cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ31㎜
○加賀市立図書館蔵聖藩文庫本　810-2　資料館フィルム276-104-2による、第五冊を欠く、原題簽、

16秋田屋発行版

秋田屋発行版は、奥付が大字本秋田屋発行版のそれと同じで、「諸國發行書肆」として秋田屋等十三書肆名を連ねてあるもの、補刻版の後刷、原装五冊、大きさ　約26cm×約19cm、表紙は薄褐色刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じ。

北大文学部紀要

○国立国会図書館蔵府内官庫本　126-34　原表紙、原題簽、厚さ32㎜
○北海道大学蔵札幌農学校本　原表紙、原題簽、厚さ28㎜
◎秋田屋発行版所在
　東京大学史料編纂所、

17明治秋田屋発行版

明治秋田屋版は明治二年に寶文堂が補刻した旨の表紙見返し（図27）をもつものである。奥付に秋田屋発行版と同じ十三書肆連名のものを付する、補刻版の後刷、原装五冊、大きさ約26㎝×約19㎝、表紙は薄褐色刷毛目横引、題簽は寛文渋川版と同じものと、新刻のもの（次の明治大野木版の項参照）とがある。

○上総舎蔵本　原表紙、原題簽（寛文渋川版と同じ）、厚さ32㎜
○国立公文書館蔵内閣文庫進徳黌本　263-1　約26㎝×約19㎝、原表紙、原題簽（明治大野木版と同じ）、厚さ25㎜、序一凡例一題倭名鈔一目録の順になっている。
◎明治秋田屋版所在
　大阪府立図書館石崎文庫、

18明治大野木版

明治大野木版は、秋田屋版と同じく秋田屋によるもので、秋田屋版と同様、表紙見返しに「明治二補刻」「大坂書

肆　寶文堂發兌」とあるが、奥付は下のようになっている。補刻版の後刷、原装五冊、表紙は薄褐色刷毛目格子、題簽は新しく掘り直した複廓のもので、「和名類聚抄　一（・四）」「倭名類聚抄　二（・五）」「味名類聚抄　三」の体裁であるが、冊ごとに書体を替える（模写図14）、

○国立公文書館蔵内閣文庫千葉県本　209-2　約26cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ28㎜

○東京大学国語研究室蔵言語取調所本　19-167　約25cm×約19cm、原表紙、原題簽、厚さ31㎜

○上総舎蔵鏡之舎本　第五冊を欠くため奥付が無い。また明治二年見返もつけられていないが、第三冊の原題簽が大野木のものなので、仮にここに入れておく。約26cm×約20cm、原表紙、第二冊手書替題簽、第三冊原題簽、序―凡例―題倭名鈔―目録の順になっている、

◎明治大野木版所在

宮城教育大学、

◎明治版所在、秋田屋・大野木のいずれか未詳

岡山大学池田文庫、国会図書館、浜松市立図書館、久留米市民文庫、

書籍製本發賣所
大阪府下書肆
大野木市兵衛
第貳大區七小區
心齋橋筋一丁目七番地

◎板本所在、大字本・小字本の別は未詳

静嘉堂文庫松井本二本、東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部、東京書籍館、日本大学、大阪大学石浜文庫、早稲田大学会津文庫、東海大学青山文庫、関西大学増田文庫、関西大学泊園文庫、神宮文庫四本、九州大学麻生文庫二本、ノートルダム清心女子大学、大英博物館二本、久留米市立図書館、岩崎文庫、熱田神宮宝物館熱田文庫菊田家寄託図書、半田市立図書館、第四高等中学、彰考館五本（焼亡）、

以上一八種二二類に分けたが、各類の違いを要約すれば次ページのようになる。

慶安版、寛文村上版の刷りの先後や寛文渋川版の補修の有無は外装だけからは識別できない。また、小字渋川版の刷りの先後は題簽の違いに対応するようであるが、原題簽でなければこれも識別できない。しかしそれ以外の類別は外装的記述だけで十分である。目録等で簡潔に示すには、

元和三序、慶安元、
元和三序、寛文七、村上勘兵衛
元和三序、寛文十一、積徳堂
元和三序、渋川清右衛門
元和三序、渋川清右衛門、奥付弘簡堂
元和三序、渋川清右衛門、見返嘉永四、奥付山田茂助

	大字本	冊	年記	奥付	題簽
1	慶安版	10	慶安元		慶安
2	万治版	10	万治二・中村		慶安
3	寛文村上版	10	寛文七・村上		慶安
4	寛文渋川版	5	寛文七・渋川		渋川
5	秋田屋発兌版	5	寛文七・渋川	秋田屋発兌	渋川
6	秋田屋発行版	5	寛文七・渋川	秋田屋発行	渋川
7	銭屋版		寛文七・渋川	京都・銭屋	

	小字本	冊	年記	奥付	見返	題簽
8	寛文積徳堂版	10	寛文11・積徳堂		積徳堂	積徳堂
9	貞享村上版	10	貞享5・村上		積徳堂	
10a	渋川版・先刷	5	・澁川		慶安	
10b	渋川版・後刷	5	・澁川		渋川	
11	弘簡堂版	5	・澁川	弘簡堂	渋川	
12	升屋版	5	・澁川	升屋勘兵衛	渋川	
13	嘉永版	5	・澁川	山田茂助	嘉永4 渋川	
14	銭屋版	5	・澁川	皇都・銭屋	渋川	
15	娑々木版	5	・澁川	娑々岐惣四郎	娑々岐	
16	秋田屋発行版	5	・澁川	秋田屋発行	渋川	
17	明治秋田屋版	5	・澁川	秋田屋発行	明治2 渋川	
18	明治大野木版	5	・澁川	大野木	明治2 大野木	

元和三序、渋川清右衛門、見返明治二、奥付大野木市兵衛

のように記述する方が、「刊」「印」「修」の別を記すに意を用い過ぎて年記や書肆名を記さず

慶安版の再印、

寛文七年印、

寛文十一年版の重印

などと記述するよりは確実である。

刷りの先後の度合いは、大字本は、Ⅰ慶安版先刷、Ⅱ慶安版後刷・万治村上版、Ⅲ寛文村上版先刷、Ⅳ寛文村上版後刷、Ⅴ寛文渋川版、Ⅵ秋田屋版の六段階くらいに分けられる。また、小字本はⅠ寛文積徳堂版、Ⅱ貞享村上版、Ⅲ渋川版先刷、Ⅳ渋川版後刷、Ⅴ弘簡堂版、Ⅵ升屋版以後明治版までの六段階くらいに分かれる。

江戸初期、万治二年からの書籍目録[9]に倭名類聚鈔板本の大字本および小字本のことが記されている。次ページ以下の表はそれらを年代順に摘記したものである（▽印は校異による復元）。

すでに万治二年版『書籍目録』に倭名類聚鈔の名がある。これは大字本である。小字本は延宝三年版に初めて「新板」として現れる。刊記の寛文十一年（一六七一）の四年後であり、書籍目録への掲載には多少の年月の経過を見る必要があるのだろう。元禄九年版に初めて書肆名が載り、大字本は村上、小字本は小紅やとなっている。この小紅屋は積徳堂のことである。貞享五年＝元禄元年（一六八八）から八年を経ているが、村上への変更はまだ記されておらず、元禄十一年版以後になってようやく「小紅や」の文字が消える。

▽万治2（一六五九）	『新板書籍目録』（万治二年写）	倭名類聚鈔
寛文6（一六六六）頃	『和漢書籍目録』（寛文無刊記）	十冊　和名類聚鈔
寛文10（一六七〇）	『増補書籍目録』	順和名　十冊
寛文11（一六七一）	『増補書籍目録』	十　順和名
▽延宝元（一六七三）頃	『増補書籍目録』（延宝初無刊記）	十　順和名
▽延宝2（一六七四）	『増続書籍目録』（延宝二年刊）	十、順和名　源順作
延宝3（一六七五）	『古今書籍題林』（延宝三年刊）	類分テ事物ノ和名ヲ記シ註解ヲ下ス
		新板　古板」
〃	『新増書籍目録』（延宝三年刊）	十　和名類聚　源順
天和元（一六八一）	『書籍目録大全』（天和元年刊）	十　同新板
▽天和3（一六八三）	『新増書籍目録』（天和三年刊）	十　和名類聚　源順　拾五匁
▽貞享2（一六八五）	『改正広益書籍目録』（貞享二年刊）	十　同新板　拾匁
		十　和名類聚　源順
元禄5（一六九二）	『広益書籍目録』（元禄五年刊）	十　同新板
		十　順和名　源順作
		類分テ事物ノ和名ヲ記シ註解ヲ下ス
		新板　古板
		十　順和名
		類分テ事物ノ和名ヲ記シ註解ヲ下ス
		新板　古板

元禄9（一六九六）　『増益書籍目録大全』（元禄九年刊）

十　村上　和名類聚　九匁（「わ部」）
十　小紅や　同細字　六匁
十　小紅や　順和名　六匁（「し部」）
十　村上　同大字

▽元禄10（一六九七）頃　『増益書籍目録大全』（元禄九年刊後修）

十　村上　和名類聚　九匁
十　小紅や　同細字　六匁
十　小紅や　順和名　六匁（「し部」）
十　村上　同大字

▽元禄11（一六九八）　『増益書籍目録大全』（元禄11年修）

十　村上　和名類聚　十五匁
十　同細字　十五匁

元禄12（一六九九）　『新板増補書籍目録』（元禄十二年刊）

十　順和名　源順
新板　古板
類ヲ分事物ノ和名ヲ記シ註ス

▽宝永3（一七〇六）　『増益書籍目録大全』（宝永3増修）

十　村上　和名類聚　十五匁
十　同細字　十匁

宝永6（一七〇九）　『増益書籍目録大全』（宝永6増修）

十　村上　和名類聚　十五匁
十　同細字　十匁

正徳5（一七一五）　『増益書籍目録大全』（正徳5年修）

十　村上　和名類聚　廿五匁
十　同細字　十五匁

▽享保7（一七二二）　『増益書籍目録大全』（享保7年修）

十　村上　和名類聚　廿五匁
十　同細字　十五匁

この小紅屋は元禄九年版『書籍目録』では五五点の本（重複掲載が三点ほどある）の版元として挙がっている（市古夏生氏「書籍編纂書目板元名寄」[10]参照）。ただし「小紅や」が四二点、「小紅や久」が八点、「小紅や八」が三点、「小紅や八郎」が二点、となっている。「小紅や八郎」と「小紅や久」のいずれが積徳堂であるか、不明である。一方、矢島玄亮氏の『徳川時代出版者出版物集覧』[11]『同続編』[12]には積徳堂刊として倭名類聚鈔（寛文十一年）のほかに史記評林（寛文十三年）・円機活法韻学（延宝元年・『新刻重校増補円機活法詩韻全書』は後の重版であろう）の二書が挙げられている。この二書は『元禄太平記』巻一の二に

大阪のみにかぎらす。京都の本屋中間にも。すぐれて見にくき衆中多し。つくゝゝ本屋の不勝手なる。その源をかんがふるに。をゝくは唐本を和板にするよりはじまれり。中比史記。活法のあらそひにて。七屋はおとろへ。小紅はすたりぬ。

として知られるものである。[13]七屋は八尾甚四郎の朧曖表現で、八尾と小紅が寛文十二年～十三年に両書を相次いで出して紛擾に及び、衰退乃至廃業に至ったものであろう。史記評林は後々まで八尾板と紅屋板の両板株が別々に引き継がれて重刻され、紛擾のもととなっている。[14]この小紅屋から出た倭名類聚鈔の小字本も史記評林と同様の紛擾の種を孕んでいたのではあるまいか。いずれにせよ、貞享五年（一六八八）に小字本の板木は大字本の版元の村上勘兵衛（平楽寺）に引き取られて行ったのである。

その後、倭名類聚鈔の版権は大字本・小字本ともに大阪の渋川清右衛門（柏原屋）に移るのであるが、それがいつ

のことであるかは不明である。上記の書籍目録では享保七年（一七二二）版でも「村上」となっており、移転はこれ以後と言えなくもないが、目録への掲載の遅れを考慮すれば、享保七年以前を否定し得るものでもない。京都書林仲間の『濟帳』に「順和名壱部摺被為仰付候享保八年四月」とあり[15]、これがあるいは渋川への移転と関係あるかとも考えられるが、確証はない。ただし、渋川版に実際に書き込まれている識語の最古例が安永二年（一七七三）であるので[16]、移転はこれ以前ではある。

以後、寛政二年（一七九〇）の大坂の『板木総目録株帳』[17]に

倭名類聚抄　十　柏清
同　大字　十　柏清

文化九年（一八一二）改正の大坂『板木総目録株帳』[18]に

倭名類聚抄　十　柏清　「松宅　秋市（支）」
同　大字　十　柏清　「松宅　秋市（支）」
同　残篇　柏清

とあって渋川が板株を保持していたことが確認出来る。しかし文化九年の株帳には「柏清」の下に「松宅　秋市」と

追記され単廓小印「新正」が押されている。これは板株が渋川から秋田屋市兵衛（大野木）に移ったことを示すものである。その時期がいつごろかは、「新正」の印によってある程度推定することが出来る。この株帳でこの「新正」の角印を押す書を『買板印形帳』[19]『板木目録』[19]『出勤帳』[20]で照合すると、早い年代のものとしては、

浙西六家詩抄	買板印形帳	嘉永六年十一月買取
古文転刑	板木目録	嘉永六年十一月免許
備中国巡覧大絵図	板木目録	嘉永六年十一月免許
小学　片仮名附注本	板木目録	嘉永六年十二月免許
月瀬／尾山　梅渓真景之図	買板印形帳	嘉永七年正月買取
和荘兵衛続篇	出勤帳	嘉永七年正月十一日出来

のようになり、もっとも年代の下がるものとしては、

道春点四書　木村版	買板印形帳	安政四年十二月買取
蒙求国字解	買板印形帳	安政四年十二月買取
同　図絵	買板印形帳	安政四年十二月買取
同　理諺抄	買板印形帳	安政四年十二月買取
枯尾花	買板印形帳	安政五年正月買取
新百員	買板印形帳	安政五年正月買取

の如くになる。すなわちこの角印は嘉永六年（一八五三）十一月から安政五年（一八五八）正月までの間に出版許可

か板株移動のあった書の項に押されており、柏清（柏原屋清右衛門・渋川）から秋市（秋田屋市兵衛・大野木）への版木の移動もこの時期から隔たらないものと推量されるのである。従って宝文堂（秋田屋）の関わっている嘉永四年版はまさしくこの板株買取を機に補修重印されたものと見ることが出来る。嘉永版は大阪の宝文堂と京都の弘簡堂（升屋勘兵衛・須磨）・竹苞楼（銭屋惣四郎・佐々木）の合梓であり、京都の書肆が各自に奥付を付けて販売したのが弘簡堂版・升屋版・銭屋版・娑々木版なのであろう。これらの小字本補修版に書き込まれている最古例の識語が安政二年（一八五五）であること[21]も、この推量と整合する。ただ、嘉永版（嘉永辛亥年の見返しのあるもの）の奥付が合梓とは関わりのない京都の山田茂助（聖華房）となっている事情は未詳である。山田は升屋・銭屋とは別に秋田屋分の印本を扱う京都の販売店なのであろうか。

江戸での販売は秋田屋との提携によったことが、秋田屋発兌の奥付によって知れるが、さらに秋田屋発行の奥付によって全国各地の提携店を見ることができる。ここでは京都の書肆は、堺屋仁兵衛となっており、升屋・銭屋・山田のいずれの名も見えない。

秋田屋は明治二年（一八六九）に見返しを新たに印刷し、はじめは奥付にもとのまま秋田屋発行のものを付しているが、のちに大野木市兵衛の奥付に代えられる。この奥付には大野木の住所が大小区で示されており、この制度の行われていた明治五年（一六七二）から十一年（一八七八）ころまでの販売であることが知られるのである。

注

1　宮澤俊雅「倭名類聚抄の尾張本について」（『山口明穂教授還暦記念国語学論集』一九九六年6月、東京、明治書院）。

2 狩谷望之『箋注倭名類聚抄』（一八二七年序、一八八三年4月、印刷局）。（京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄　本文編』（一九五八年7月、臨川書店）による。）

3 『国書総目録第八巻』一九七二年2月、東京、岩波書店。

4 中田祝夫「和名抄関係事項略年表（稿）」（『倭名類聚抄元和三年古活字版二十巻本』一九七八年3月、東京、勉誠社）。

5 高梨信博「板斎書入倭名類聚鈔解題」（『板斎書入倭名類聚鈔二』早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第2巻、一九八七年12月、東京、早稲田大学出版部）。

6 不破浩子『箋注倭名類聚抄の研究巻一―序』一九八九年一月、奈良女子大学文学部国語国文学科遠藤研究室、孔版。

7 国文学研究資料館編『古典籍総合目録第二巻』一九九〇年3月、東京、岩波書店。

8 前掲注6。

9 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』一九六二年12月、一九六三年6月・10月。

10 市古夏生「書林編纂書目板元名寄（三）」白百合女子大学研究紀要17　一九八一年12月。

11 矢島玄亮『徳川時代出版物集覧』一九七五年12月。

12 矢島玄亮『徳川時代出版者出版物集覧続編』一九七六年12月。

13 東洋文庫・（日本古典文学会）『岩崎文庫貴重本叢刊　第三巻　浮世草子Ⅰ』一九七二年7月。

14 京都書林仲間の『上組済帳』の宝暦四年・寛政三年及び大坂本屋仲間の『裁配帳』寛政元年九月、寛政四年正月。宗政五十緒・浅倉治彦『京都書林仲間記録5』一九七七年12月。
大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録　第九巻　裁配帳』一九八二年3月。

15 前掲書（注14）。

16 小字渋川版本居宣長記念館本の安永二年（一七七三）本居宣長識語を宣長自筆と見る。小字渋川版白百合女子大学蔵本の安永二年（一七七三）本居宣長識語は右の転写識語であろう。これに次ぐものは小字渋川版東京大学国語研究室黒川文庫契沖本の安永四年（一七七五）中臣某識語。

17 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録　第十二巻　板木総目録株帳一』一九八八年3月、3ページ。

18 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録　第十三巻　板木総目録株帳二』一九八七年3月、7ページ。
19 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録　第十一巻　諸記録集（続）』一九八六年3月。
20 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録　第五巻　出勤長五』一九八〇年2月。
21 弘簡堂版九州大学中尾本の安政二年（一八五五）穂積泰彦識語。